



文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官

豊口 和士

これからの書写・書道教育 (31)

平成29年3月に小学校・中学校、平成30年3月に高等学校の学習指導要領が改訂・告示されて以降、小学校、中学校、高等学校等の学校教育現場では、様々な教育課題に向き合いながら、これからの社会に対応するべく教育の改善と充実に日々取り組まれているところかと思えます。そうした中、令和7年度より、中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会の各ワーキンググループで、次期学習指導要領改訂に向けた検討が進められており、次期改訂もいよいよ近づいてきています。

本連載では、次期改訂も見据えながら、現行の教育課程を踏まえたこれからの書写・書道教育と、関連する事項について紹介していきます。現行の教育課程を学校並びに社会において共有し相互に理解しあうことで、学校教育並びに社会教育としての書写・書道教育の更なる発展・振興を図り、学校だけでなく、社会全体で児童・生徒の学びと成長を支援してまいります。

今回は、いわゆる「書道」というとき、「道」にどのような意味が捉えられているのかについて、確認してみたいと思います。

一 武道や芸道における「道」

一般社会では、広く「書道」や「書」と呼ばれ、学習、実践、表現される書道ですが、学校教育では、小・中学校で国語科の「書写」、高等学校で芸術科「書道」として学習されます。学校教育における「書写」と「書道」は、教科が異なり、学習する目標も内容も異なります。

それでは、書道における「道」について考えていきましょう。まず、一般的な「道」のイメージとして、柔道や剣道、弓道などの武道や、茶道や華道、香道などの芸道と同じイメージで書道を捉える人も多いのではないのでしょうか。このように使われる「道」の意味について、社会全体で厳密な定義が共有されているわけではありませんが、何となくであっても、私たちは共通点を感じ取っているのだらうと思

ます。

それは、武道であれ、芸道であれ、それと向き合い、学習したり練習・修行したりする中で、時間を費やして技術の習得・習熟を必然的に伴う活動・営みにおいて、「技術の上達」はもちろんのこと、それを超えて、「人格や人間性の形成・涵養」を追求するということなのでしょう。おそらく「道」の付く活動・営みに対するイメージとして、「人間形成」といった意味でのイメージが共通するのだらうと思えます。

中国の思想や哲学、儒教等を背景に、仏教や神道が織り混ざる形で生活観や人生観、倫理観、道徳を独自に形成してきた日本では、武道や芸道といった、古くから「道」に関する活動・営みに対して特別な思いが込められていることは容易に想像できるでしょう。

例えば、スポーツとして括られる様々な競技種目では、試合をして勝敗を決する以上、少なからず各競技種目のルールに則った上での勝敗は重要なものですが、試合での

勝敗や技術の習熟を超えて、時間をかけてその活動や営みと向き合う中で実現される「人間形成」の側面がより重要とされるのは、世界共通である一方で、日本ではその傾向が強いように思います。

新しい例として、新渡戸稲造による『武士道』では、日本の武士の精神的支柱となる7つの「徳」である「義」「勇」「仁」「礼」「誠」「名譽」「忠義」により、武士並びに日本人が尊ぶべき普遍的な倫理観や道徳が、武士道として述べられています。

また、別の例として、弓道の級・段位の資格基準では、上位の段位に達するまでは、技術（射術）の習熟には言及せず、射型・体配（基本動作や弓矢の扱い等）の正しさや整いが重視されます。

こうした傾向は、武道における「心技体」、芸道における「心技」といった価値観にも表れており、武道と芸道で一致するものではないでしょうが、「心」（精神力、集中力、気力等、またそれを制御する力）、「技」

（技術、またそれを運用する力）、「体」（肉体、体力、身体、またそれを制御・運用する力）をバランスよく、自らで涵養していくことが目指されているものと思われれます。

二 中国の思想・哲学の「道」

中国における書や絵画、音楽、詩等の技芸の成立の背景には、中国における人生観や世界観といった思想が必然的に色濃く存在します。今日の日本の書道もまた、中国の書を起源とする以上、少なからずこうした中国の思想の影響があると考えるのが自然であり、その主たるものが、いわゆる老荘思想哲学の核をなす「道」の思想です。以下、簡単に紹介します。

老荘思想における「道」は、「無為之道」「天地大自然之道」であり、天地大自然の造化の理法、万物の根底的真理とされ、さらに、「無為自然」として、すべては自然の必然に基づき、自然の流れこそが道であるとされます。また、「万物斉同」「万物一体」であり、道において万物は

一つであり、人間もまた自然の中の一つとされます。そして、流動変化する存在の中の一瞬の「今」を自身の「今」とすることで、道（変化の流れ）を友として遊ぶことができるとしています。（そもそも言葉で説明できないのが「道」であるともされ、できるだけ噛み砕いて平易に説明しています。）いずれにせよ、老荘思想における「道」は「天地大自然の造化の理法」であり、「人間もまた自然の中の一つ」であることは読み取れます。

三 書道における「道」

「書道」や「書」などの呼び方について、「道」のもつ意味に一定の正解があるわけではありませんが、「道」が付くことにより、表現における制約上の堅苦しさや、学習等において礼儀作法などを強いられるといった印象があるのかもしれませんが、書道（書）と向き合うことは自分自身と向き合うことであり、技術の習得・習熟とともに、その活動・営みの本来的な理法や精神への理解を深

めながら、自分自身の人間性を形成し高めていくという点では、一般社会での「道」のイメージは大きく間違っているわけではないでしょう。

さらに、老荘思想における「道」の考え方を意識するとすれば、自分自身も自然の中の一つであることを自覚し、自然物の特性をそのままに作られる用具・用材（墨、筆、紙、硯の文房四宝）と自然の中の一つである人間の身体性により生じる、自然の理法（原理）に基づく自然現象ともいえる一瞬に実在する「今」の価値を、自身の「今」の価値として捉え、自ら尊ぶということが、書道における「道」なのでしょう。

今日見られるアートとしての書では、国際的な価値や評価の獲得、新たな表現の創出を目指し、これまでの書の伝統と文化から脱却するべく、書道と捉えられることを嫌う傾向もあるのかもしれませんが、書道（書）の美と、独自の存在価値は、「道」の中にそれを読み解くヒントがあるように私は思います。